

## 曹植評伝（二）

福井佳夫

### 一一 多感のひと

転蓬の日々

この章では、曹植の誕生から二十歳ごろまでをかたってゆこう。

この時期は、兄曹丕との後継争いが、まだ本格化する以前である。彼にとっては、無邪気におのが才腕を披露することができた、たのしく、また充実した日々だったといつてよい。

曹植は、父曹操（一五五～二一〇）が三十八歳のときに生まれた。曹操には、曹植をふくめ、何人の子どもがいたのか、正確なところはわからない。ただ男子については、『魏志』卷二十の武文世王公伝に「武皇帝に二十五男あり」とあるので、いろんな女性に「最低」二十五人はうませているのだろう。女子のほうは同種の伝がなく、曹憲や曹節、曹華など数人しか確認できないが、もし男子と同数ほどうまれていたとすれば、男女あわせる

と、五十人ほどはいたことになるう(じっさいの人数は、もっとおおいはずだ)。曹植は、それらのうちの一人なのである。

母は卞氏(一六〇～二三〇)といい、このとき三十三歳。彼女は二十歳で曹操にとつき、曹丕、曹彰の二男をあげ、さらにこの曹植をうんだ(曹植の弟の曹熊もうんだが、早世した)。曹植を出産したときは側室の立場だったが、のち正妻の丁氏が廃されるや、正室となった。これによって曹丕や曹植らは、右の五十人ほどのなかでも一段上の優位にたてたのだった。この卞氏、息子の曹丕(文帝)が即位すると皇太后の称号をおくられ、さらに曹叡(明帝)が即位すると太皇太后と称されたのである。

この卞氏、娼妓の出身だったというが、なかなかよくできた女性だったらしい。丁氏にかわって正室となったが、廃された丁氏にその後も丁重におつかえするなど、万事に謙虚で、質素な暮らしぶりだったという。この曹植のこともよくかわいがってくれ、のち文帝こと曹丕が、弟の曹植に害をおよぼそうとすると、親身になってかばってくれたのだった(後述)。

曹植はどこで生まれたのか。生地は、兗州東郡の東武陽だったろうと推測される。このころ父の曹操が、その地の太守に任じられていたからである。

では、どこで成長したのか。それは一定の場所ではなく、いろんな地にうつりすんでいたようだ。そのことは、当時が、たいへん混乱した世相だったことと関わりがある。

群雄が割拠したこの時期、父の曹操はあちこちを転戦し、席のあたたまる暇もなかった。どの州におもむき、どの地に居住したとしても、そこがいつ戦場にならぬともかぎらず、一カ所に定住することはできなかった。そのため曹操は、家族を「そのときそのときの」安全な場所、あるいはそうおもわれるところにすませたのであ

る。それは、自分の「当時の」根拠地だったり、信頼する人物の庇護のもとだったりした。そうした事情によって、少年時の曹植は、ずっと生地にとどまりすむことなく、あちこちと居住地を移動させつつ、成長していったのである。

では少年時、転々と移動しつつも、比較的ながく居住した地は、どのあたりだったのだろうか。それはおそらく、譙、鄆城、浚儀、東阿、許（許昌、許都とも）、鄴あたりだったろう。このなかでとくに重要なのは、父曹操の根拠地というべき譙、そして許、鄴の三つの地である。

まず譙は、曹一族の父祖由来の地だといってよからう。父の曹操も、『魏志』本伝によれば「豫洲の」沛國譙の人」とされる。じっさい現在でも、この地から曹一族の墓群がおおく発見されており、おそらく当時の譙には、曹一族の屋敷はもとより、広大な莊園もひろがっていたのだらう。

祖父の曹騰は、宦官のトップたる中常侍や大長秋になり、またその養子となった父の曹嵩（当時、宦官は養子をとって家名を存続することができた。曹嵩は夏侯氏の出だったともいわれる）も、売官によって大尉の地位を手にいれている。すると曹操の実家は、祖父が宦官だったとはいえ、そうとうの資産家であり、譙では有力な一族だったろうとおもわれる。そのためだらう、曹操らは、おおきな仕事が一段落したとき、旗色がわるくなってきたなど、なにかといえれば休息するかのようになり、故郷というべき譙へかえってのんびりしたり、爪をといだりしていたのだらう。

つづいて許は、曹植十二歳以前に、そして鄴は十三歳（二〇四）以降に、それぞれ比較的ながく居住したところである。この許と鄴のふたつの地は、曹植がすんだところというより、父の曹操が根拠地とした場所といったほうが適切だらう。許は、建安元年（一九六）、長安から脱出してきた献帝を、曹操がむかえ入れたところであ

り、また鄴は、建安九年（二〇四）に袁尚をやぶって入城してから以後、ここにおのが軍府をおいたのだった。そうした父に、曹植らの家族ははしたがったのである。

以上の三地が曹植の主要な成育地であり、これ以外はいわば臨時の居住地だったといつてよい。曹植をふくめた家族は、父やその命をうけた臣下らに保護されつつ、こうした土地を転々としたのだった。曹植は詩中で、しばしば「後半生の」自分を転蓬にたとえたが、こうみると、後半生にかぎらず、わかいころから転蓬のような生活だったといつてよいかもしれない。

かくいろんな地を転々としながら、曹植はどのような日々をおくっていたのか。これをうかがう資料として、兄の曹丕の「典論」自叙篇がある。ここで曹丕は、自分の少年時代をふりかえり、つぎのようにのべている。

そのころ黄巾が海岱の地で猛威をふるい、山賊らは并州や冀州であばれていた。彼らは勝ちに乗じて各地に侵入し、席卷しながら南下してきた。村里の人びとは兵火をみてはにげだし、城市の人びとは戦塵を目にしては潰走した。かくして民衆は死にたえ、草茅のように死骸をさらしたのである。

このとき余は五歳だった。父うえはかかる混乱をみて、余に射術をまなばせ、六歳でこれを修得するや、騎馬もおしえてくれた。おかげで、八歳のときには騎射もできるようになった。このように当時は多難な日々だったので、父うえが遠征するたび、余もしたがったのである。

これによると、当時は黄巾や山賊が跳梁し、「民衆は死にたえ、草茅のように死骸をさらした」おそろしい時代だったようだ。かかる時世への自衛のためだろう、曹丕は父の命により、五歳ころから射術や騎馬をおそわり、八歳にはもう馬上で矢を射ることもできるようになっていたという。そしてつねに、父の征戦にしがっていたようだ。そのためこの曹丕、文武の両道にひいでた若者になり、詩文だけでなく、武術のほうでも人後におちな

かつたのである。

また次兄の曹彰にいたっては、武術一辺倒といへべき人間だった。おかげで父の曹操から、「お前は読書もせず、騎馬や剣術ばかり稽古しておるが、それらは匹夫にわざいにすぎぬぞ。もっとしつかり書物をよめ」と説諭されるほどであった。

とすると曹植も、おなじような日々をすごしていたとしてよい。それゆえ彼は、詩文だけまんでいたのではなく、兄たちとおなじように武術を稽古し、そして長じては戦場にもでていたことだろう。

もっとも彼が、曹丕のように射術や騎馬を得意としていたかどうかは、記録がないのでわからない。ただ、武芸がきらいだったとか、臆病ぶりをからかわれたとかの記述はない。くわえて、彼の詩中にはしばしば、

「白馬篇」 軀みを捐すてて国難に赴き、死を視ること忽たちち帰するが如し。

「責躬詩」 甘んじて江湘に赴き、戈を呉越に奮はん。

「雑誌五」 閒居は吾が志に非ず、心に甘んじて国憂こくうに赴かんとす。

「雑誌六」 国の讎あだは亮あきらに塞ふさぎず、心に甘んじて元もとを喪なげわんことを思う。

などの意気軒昂たる記述がみえており、戦場や軍功には無関心ではなかったとおもわれる。それゆえ史書では、戦場における武勇や統率力は確認できないものの、すくなくとも武芸や軍事にはつよい意欲があつたとかんがえてよからう。

ではこの曹植、具体的に何歳ごろから、父の征戦にしたがつたのだろうか。曹植は幼少時から父に随従していたはずなので、いずれの随従を従軍とみなし、初陣とすべきかは、なかなかむづかしい。

ただ、たとえば建安十二年（二〇七）、父の曹操は北方の三郡烏丸の地へ軍をすすめたが、この戦役に十六歳

の彼も軍人として従軍したのではないか、という見かたがじゅうらいから指摘されている。曹植が「求自試表」のなかで、

臣は以前、亡き武皇帝にしたがって、南は赤岸までいたり、東は東海にのぞみ、西は玉門をみやり、北は長城の向こうまでゆきました。

臣昔従先武皇帝、

南極赤岸、

西望玉門、

東臨滄海、

北出玄塞、

とかたっているのが、その根拠である。この「北は長城の向こうまでゆきました」というのが、曹操の三郡烏丸への進攻と、時期的、地理的にびつたりと一致するのだという（張可礼『三曹年譜』九十七頁など）。この「求自試表」の記述があいまいなので、これが真に曹植の初陣を意味するのかどうかは判然とせぬが、おそらくこのころから、曹植も父にしたがって戦場におもむいていたのだろう<sup>[1]</sup>。

戎旅の間に長ぜり

曹丕は、おのが若年の日々を「戎旅の間に長ぜり」だった、とかたっている（『典論』自叙）。つまり、自分は戦旅のなかで成長した、とのべているのである。おなじようなことは、弟の曹植の少年時にも該当するはずだ。そしてそれはまた、曹操の教育方針でもあったのだろう。曹一族にとって比較的安全だったのは、譙の地だったろうが、曹操はあえて曹丕らをそこに定住させず、戦地へ帯同したのである。

とうぜんのことながら、こうした日々は安穩ではありえない。父の曹操が、いちどでも見とおしをあまり、ひとつでも判断ミスをおかしたら、自身はもとより息子まで、危機的状況においこまれかねないからである。最

悪の場合は親子、あるいは一家全滅ということもありえただろう。

たとえば、曹操と同時期の群雄のひとり、公孫瓚の場合がそうだった。彼は後漢末期の動乱のなかで、烏丸や黄巾の賊をやぶって名をあげ、河北の地に割拠した。ところが、袁紹が当地に勢力をつよめてき、両軍ははげしい戦いをくりひろげる。そうしたさい、この公孫瓚、人望あつた劉虞を殺害するなど、さまざまな判断ミスをおかし、ついに易京の要塞におこまれてしまったのである。そして袁紹の軍が地下道をほって、要塞へ突入しようとしているのを見て、もはや敗北はまぬがれぬとさどつた。すると公孫瓚、帯同していた自分の姉妹と妻子をすべてくびりころし、みずから火をはなつて焼死したのだつた（『資治通鑑』巻六三）。梟雄らしい壮烈な最期だといつてよい。

これは一例にすぎぬが、曹操ら漢末の群雄たちは、こうした一家（あるいは親子）全滅と隣りあわせという状況のなかで、はげしい攻防をくりかえしていたのである。じつさい、曹操もかつて、そうした判断ミスをおかし、自分の父親と長子とを死なしてしまつてゐる。あわせて紹介しておこう。

まず父親の死は、曹操三十九歳（初平四年、曹植二歳）のときであつた。兗州をおさえた曹操は、自分のもとに父の曹嵩をよびよせようとした。彼としては、泰山太守の応劭や徐州牧の陶謙に、護衛の兵をだしてくるよう依頼するなど、途中の安全にはじゅうぶん留意したつもりだつた。ところが、護衛してくれるはずの陶謙の部下が、曹嵩の輜重百余両という財産に目がくらんでしまつて、これを殺害し、財宝をつばつて逐電してしまつたのである。

父をころされた曹植は、すっかり逆上してしまつた。陶謙に責任ありとして、まず彼が支配する彭城にせめこんだ。さらに取慮、睢陵、夏丘にも襲撃をかけ、大虐殺をおこなつたのである。当地にすむ男女数万人をころし、

それらの死体によって、泗水の流れがせきとめられた。また雞犬もみえなくなり、城邑に入びとがいなくなったという。

ついで長子の死は、曹操四十三歳（建安二年、曹植六歳）のときであった。南陽郡の宛に侵攻した曹操は、張繡（亡き叔父・張済の軍を継承していた）とその部下との投降をゆるした。ところがこのとき曹操は、亡き張済の未亡人を妾にしたのである。張繡は、この未亡人に気があったのだろうか、このことで曹植をうらみ、投降したことを後悔するようになった。かくして兩人のあいだに、緊張がはしったのである。

このとき、決断がはやかったのは、張繡のほうだった。彼は部下の軍勢をひきい、曹操軍に奇襲をかけたのである。投降からわずか十日後だ。この迅速な攻撃に、曹操はあやうかった。混乱のさなか、彼が騎乗していた名馬の絶影は、流れ矢があたって傷つき、曹操自身も、右腕に矢が命中した。さいわいなことに、長子の曹昂（母は亡き劉氏。昂はこのとき二十余歳）が自分の馬をゆずってくれたので、曹操はからも脱出できた。しかしそのかわり、曹昂と弟の子の曹安民とが戦死してしまったのである。

この失敗は、あとあとまで尾をひいた。曹操の正室だった丁氏が、曹操をばげしくうらんだのである。彼女には、子がうまれなかった。そのかわり、早世した劉氏（丁氏以前に曹操の正室だったか）がうんだ曹昂を、わが子のようにかわいがり、養育したのだった。その曹昂が、よりによって、夫の好色が原因で死んでしまったのである。彼女は「わが子を死なせておきながら、あわれんでもくださらぬ」といって、号泣しつづけた。そして実家にかえったまま、曹操がいくら謝罪しても、ゆるそうとしなかった。けっきょく曹操はしかたなく、丁氏を離縁したのだった（この後、卞氏がくりあがって正室となり、曹丕が長子となる）。

この曹昂の死と、そして丁氏の恨みとに対しては、さすがの曹操も、寝さめのわるい思いがしたようだ。彼は、

生涯このことを後悔しつづけ、死のまぎわ、つぎのよつにかたつたという。「あの世にいつて、もし曹昂から私の母つえ（丁氏）は、どこにいらっしやいますか」とたずねられたら、わしはどう返答すればいいだろうかなあ」と。

「典論」自叙によると、十一歳だった曹丕も、この張繡との戦いするとき、父が奇襲をかけられた、まさにその場にいたらしい。彼の場合は、なんとか「馬に乗りて脱するを得たり」だったので、事なきをえたのだった。かく、このときの張繡の襲撃は、曹操や曹丕まで枕をならべて討死にということもありえた、たいへんスリリングな場面だったらしい。曹操親子はこうした危険のなかで、日々をすごしていたのである。

この張繡との戦いとき、六歳だった曹植もこの場にいたのかどうかは、資料はなにもかたつておらず、わからない。ただこの事件、曹父子の大ピンチだったことはまちがいない。そのため後日、曹植は兄から「あのときは、オレもあぶなかつたぞ」と、このときの話をきくこともあつただろう。成人した曹植は、おのが詩文のなかでしばしば、慷慨ふう気概をかたつたり、軍功をあげたいと熱望したりしているが、曹父子のこうした経歴をかんがえれば、なるほどと了解できるというものだ。

性に任せて行つ

この曹植は、どんな人がらだったのだろうか。このことは、曹植の評伝を叙するさいの前提として、あきらかにしておく必要があるだろう。詩文のオがどうだったかは後でのべるとして、まず彼の人から、すなわち「詩文をこのむ以外の」天性の気象をみわたしておこう。

曹植の人がらに言及した資料はすくなくないが、たとえば、

性格はおおざっぱで、威儀をととのえようとせず、乗り物や衣服も華麗でなくても気にとめなかった。父の御前にすすみでて、むつかしい質問をされても、いつもさつと心対したので、とくに寵愛された。（『魏志』本伝）

すきかたてにふるまって、自分をかざらなかった。また酒をのむと、節度がなかった。兄の曹丕のほうは意図的に節制し、感情をおさえて自分をりっぱにみせかけた。おかげで「後継あらそのとき」宮女や側近らはみな曹丕を推奨したので、けつきよく曹操は兄のほうを太子としたのだった（『魏志』本伝）。

公子の曹植は仕事にはげまず、ただ遊樂だけこのんでいた。だが、生きにくさへの歎きも、しばしば詩文中でもらしていた。（謝靈運「魏太子鄴中集詩平原侯植」）

などは、曹丕の人がらを的確にかたてくれたものだろう。

これで見ると曹植は、格好をつけることなく、すきかたてにふるまうタイプだったようだ。そのため、あまり深慮せず、慎重さはとほしかったようである（ ）。さらに、酒好き、遊び好きというのは、天才にはよくありがちなことだろうが、酒乱気味だったことは、やはり欠点だといわねばならない（ ）。これを要するに曹植は、よくいえば正直で、裏表のない性分だったといえようが、わるくいえば、言動がやや放縱気味で、思慮がたらぬタイプだったといつてよからう。立太子争いで兄にまけたのも、彼の性格に慎重さが欠けていて、安定感がないようにおもわれたからだろう（ ）。

おもしろいのは、謝靈運の見かた（ ）である。これは死んで二世紀のちの曹植像であり、あまり信用はできないが、彼は仕事をせぬ遊び人だったとみられていたようである。「生きにくさへの歎き」というのは、魏朝に冷遇され、重用されなかったことをさすのだろうが、真に遊び人だったとすれば、重用されなかったのもしかたが

なかつたといわねばならない。

ところで、あまり注目されてないようだが、右のなかでとくに注目したいのは、の「父の御前にすすみでて」云々の部分である。十代前半のころだろうが、曹植、わざわざ父の御前にすすみでて、むつかしい質問に應對したという。これは、曹植の顯示欲のつよさを示唆するものだろうと、私はかんがえる。父の曹操にむかつて、「どうです。ボク、頭がいいでしょ」と自慢している利発な少年の姿が、ほのみえてくるようではないか。

この場合は、少年時代のほほえましいエピソードだといってよいかもされない。だが、彼が成長してくると、その顯示欲もあざといものになってくる。たとえば曹植十九歳（二一〇）のとき、博識の学者だった邯鄲淳（二二一―二二二）と、はじめて会見したときのことだが、典型的なものだろう。

この邯鄲淳は当時、高齡の大学者として著名であった。その淳が、荊州から曹操の軍営に避難してくるや、父の曹操も彼に敬意をはらったという。それほどの人物だったので、曹操陣営のあちこちから、ひきあいがあったようだ。じつさい、曹丕と曹植の兄弟も、淳が鄴にきたという知らせを耳にすると、そろって「邯鄲先生をぜひ自分のもとへ、お遣わしねがいたい」と、父にねがったという。すると曹操はどう対応したか。彼は意外にも、邯鄲淳を曹植のもとへつかわしたのである。以下は、『魏志』巻二十一「の裴松之所引『魏略』」の記事で説明しよう。

曹操は邯鄲淳を「曹丕でなく」曹植のもとにゆかせた。

淳がきた当初、植はよろこんで、座にまねいたが、すぐには話をしようとしなかった。

その時期、暑熱がたいへんきびしかった。そこで植は、従者に水をもってこさせ、身体をぬぐうや、おしろいをぬる。やがて「邯鄲淳のまえにあらわれ、冠のつけず拍子をとりつつ肌ぬぎ」という放埒な姿」で

椎鍛の舞を胡風におどり、また「雑戯ふう」に「玉をとばし剣をふりまわしたのである。そして「品のわるい」俳優の小説数千言話談しおわるや、淳に「邯鄲先生、いかがでしたか」といったのだった。

それから曹植は衣と頭巾を身につけ、儀容をただした。そして淳と、「まじめに」混元や造化の開始や万物の変遷の具合について論じた。それから羲皇以来の賢人や聖人、名臣、烈士らの優劣の差を論議し、ついで古今の詩文や賦誄や、政務をおこなうさいの正統な優先順位を称賛し、また用兵のさいの臨機の法についても論じたのだった

こうしたあと、曹植はようやく料理人に命じ、酒や炙り肉がだされた。しかし、座の人びとは「植の博識ぶりにあつげにとられ」沈黙したままで、植と議論ができる者はひとりもいなかった。

夕暮れになって、淳は曹植のもとからかえっていった。そして、知人にむかって曹植の才腕ぶりを嘆じ、「天人だ」とかたつたのだった。

この訳文は、私見によって些少の補いをほどこして、作成したものである。この一節は、曹植が「俳優の小説数千言を誦した」ことで、小説史のうえでとくに注目されてきた。ただ私は、このエピソードを、曹植のつよい顕示欲をしめしたものの、という観点から注目したいとおもふ。というのは、この話中における曹植の言動、たいへん奇矯であざといよように感じられるからである。

まず前半、曹植は、あえて「科頭拍袒」という放埒な態度をとつたうえ、奇妙な踊りや玉を投げ剣をふりまわし、さらに品のわるい小説をかたつた。そして、あたかも自慢するかのよう「邯鄲先生、いかがですか」とたずねている。この行動、まさに「威儀をととのえようとせず」、「すきかかってにふるまつ」ものといつてよい。そして後半、こんどは一転して、まじめな議論をしている。彼は衣冠をととのえたうえで、天地創造の話や聖賢、

文学、経世、軍事等について論じたのだった。

著名な老学者との初対面の場、そこでのこうした言動、そうとう非常識だといふべきだろう。十九歳の曹植、七十八歳の老学者にむかつて、なぜこんな奇矯な言動をなしたのか。私見によれば、これは悪気でこうしたのでなく、曹植なりにかんがえたすえのいたはずであり、お芝居だったのだろうとおもふ。

曹植はおそらく、老学者との出会いを印象的なものにしてしようとして、いろんな演出方法をかんがえたにちがいない。こうすれば感心してくれるだろう、ああすればおどろいてくれるだろうと。結果的に、曹植の奇矯な言動は、みごとに成功した。なにしろ、名だかい老学者をあっけにとらせ、「天人なり」と歎じさせることができたのだから。これによって、曹植はおのが顕示欲を満足させることができ、いたずらっぽく、「うまくいった。大先生をおどろかすことができたぞ」とよろこんだのではあるまいか。

こうして曹植、老学者をあっけにとらせることはできた。だがおかげで、おもわぬ余波も生じたのだった。この時期、父の曹操は、自分の後継を曹丕にするか、曹植にするかでまよいだしていた。ところが、この件で曹植の才に賛嘆した邯鄲淳、そうした曹操のまよいをしつてかしらすか、これ以後、さかんに曹植のすばらしさを口ばしるようになってしまったのである。おかげで兄の曹丕のほう、この老大学者に対し、不快な思いをいだくようになったという。

これを要するに、曹植、父が後継選びにまよいはじめた時期に、後先をかんがえず、こんないたずらをしでかした。そのため後日、兄と邯鄲淳とを「一時的に」不仲にさせるといふ、おもわぬ事態をひきおこしてしまったのである（その後、二人は和解した）。

もっとも、「性格はおおざっぱ」な曹植な曹植のことだ。当時の彼、父が後継選びにまよっているということ

さえ、気づいていなかったのかもしれぬ。あるいは気づいてはいても、まあかまうもんか、とおもったのかもしれない。いずれにしても、身をつつしまねばならぬ時期に、言動を慎重にすることなく、「すきかってにふるまつて、自分をかざらなかつた」ところは、いかにも彼らしいともいえよう。

曹植にいわせれば、この件、ちょっとしたいたずらをしただけで、ふかい意味はなかつた、というかもしれない。じつさい、曹植はあまり深慮できるタイプではない。だから、邯鄲淳を賛嘆させることで、おのが才能を周囲にみせつけ、太子後継レースを優位にはこぼすなどは、毛頭かんがえていなかっただろう。いやむしろ、かんがえるほどの思慮をもちあわせていなかった、というべきかもしれない（だから、こんな子どもっぽいいたずらのできたのだろう）。

ただ、いたずらにすぎぬとしても、このとき曹植はもう十九歳である。十九歳といえば、もう子どもとはいいにくい年齢だ。とすれば、右の振るまい、十九歳がおこなうにしては、奇矯にすぎ、また幼稚すぎるといふべきだろう。その意味で私は、曹植の性格を評することには、「軽躁」という語をつけくわえても、よいようにおもう。思慮ぶかい曹丕だったら、こんな手のこんだいたずら、だれかにすすめられたとしても、けっしてしようとはしなかつたに相違ない。

詩文中で曹植がしばしばかたる功業へのあこがれも、こうした無邪気な顯示欲と（さらにいえば軽躁な性格とも）通底したものだとかんがえられる。彼は詩文のなかで、軍事面で功業をあげたいという意欲を、しばしば吐露していた。さきには詩や楽府の例をあげたが、ここでは上書の文から例をあげてみよう。

伝聞によりますと、「わが大魏の一東征軍は軍備をつしない、兵士たちも多少の損傷をつけたそうです。

私はこれをきくや、食事も途中でやめ、袂をふるい裾をまくり、剣を手にとって東方をみつめ、心中は呉会

(呉郡と会稽郡)の地へ思いをはせるばかりでした。

臣は以前、亡き武帝にしたがって、南は赤岸までいたり、東は東海にのぞみ、西は玉門をみやり、北は長城の向こうまでゆきました。そのとき、父つえの行軍や用兵のさまを拝察したところ、神業のごときでありました。もとより軍事は、予想がつくものではなく、臨機応変に対処すべきものです。私はこの明君の御代におのが力をふるい、聖なる御世に軍功をうちたてたいと希望しているのです。

流聞「東軍失備、

輟食棄餐、撫劍東顧、而心已馳於呉、会矣。

「師徒小衄、奮袂攘袂、

臣昔従先武皇帝、

南極赤岸、

西望玉門、伏見所以行軍用兵之勢、可謂神妙也。

東臨滄海、北出玄塞。

故兵者不可豫言、臨難而制變者也。志欲「自効於明時、

立功於聖世。

これは、ずっとおかれて曹植三十七歳(太和二年、二二八)のとき、甥の明帝曹叡(在位二二六—二三九)にあてて上奏した「求自試表」の一節である(一部はさきにもあげた)。ここで曹植は、最近の魏の軍事的苦境を耳にして、ぜひ自分を戦場にやっつけてほしい、と嘆願している。文中に「臣は以前、亡き武帝にしたがって」云々とあるように、曹植はたしかに、曹操の生前、その遠征軍にしたがい、父の卓抜な戦いぶりをおのが眼で実見していたはずである。そつした経験もあつたので、このとき、彼の胸中に「われこそは」という意欲が生じてきたのだらう。

そうではあるが、ここにおける出征への意欲、私には、懸命なつたえというより、いささか青くさく、子ど

もっぱいもののように感じられる。たとえば、曹植は「食事も途中でやめ、袂をふるい裾をまくり、剣を手にとって東方をみつめ、心中は呉会の地へ思いをはせるばかり」だったという。この部分など、冷静かつ緻密な軍略を検討したうえで、戦場にのぞもうというのではなく、おそろく、ただ「戦いに参加したい」「功業をあげたい」というだけのことだったのだらう。

こうしたところ、わかわかしい気概をもつといえなくもないが、年齢にふさわしい成熟ぶりを有するとはいえない。三十七歳という壮年になっても、あの、奇矯な言動で邯鄲淳をおどろかし、したり顔で「邯先生、いかがですか」といった十九歳のときと、あまりかわっていないようだ。あいかわらず、無邪気な顯示欲や軽躁な功業心によって、つきうごかされている。曹植はよくもわるくも、永遠の青年なのだらう。

周知のように、曹植は父の後継になるどころか、曹丕即位後は地方においだされ、軍事や経世への意欲を満足させることはできなかった。わかいころ、野心ある連中から「ぜひ太子に」ともちあげられたため、周囲から警戒されるようになった。かくして、彼はけつきよく生涯にわたって、腕をふるう機会をあたえられなかったのだらう。

ただ私見によれば、かりにそうした機会にめぐまれたとしても、彼はおおきな成功はおさめられなかったのではない。すきかつてにふるまい（任性而行）、酒をのむと節度がない（飲酒不節）ような性格では、軍事方面にしろ、経世方面にしろ、おおきな成果は期待できないとかんがえるからだ。曹丕と曹植とが、後継候補だと評判されたとき、曹丕をおす人びとだけでなく、「中立的立場にあった」朝廷の役人や宮女からも、曹植を太子に推奨する声はでなかったという（前出）。それは、やはり曹植には、指導者として不安を感じさせるものがあったからだらう。

憤りて篇を成す

曹植の評伝を叙してゆく前提として、その人がらをみてきたが、つづいて創作方面もみておこう。彼が「文章に於けるや、人倫の周孔有るに譬つ」と詩文の才をたたえられたことは、さきにも紹介した。ではより具体的に、詩文を創作する方面では、どのような特徴があったのだろうか。

私見によれば、曹植の創作の基底には、多感さが存しているようにおもつ。多感とは、物事に感じやすく、ちよつとしたことにも感情をうごかされやすいことだ。じっさい彼は、「すきかつてにふるまつ」（任性而行）の性格と関連するのだろうか、いろんなことを見聞き、おこなつては、「も」もなくサツと反応してしまうタイプだった。そしてややもすれば、すぐ感情をたかぶらせ、過剰なほど喜怒したり、哀樂したりするのである。彼の詩文はおおく、そつした多感な性情にインスパイアされてかかれ、それゆえに情感ゆたかな傾向をおびやすかつたといつてよい。

そつした創作の典型として、ずっとあとの作であるが、名篇「贈白馬王彪」詩をあげてよいであろう。まず、その序文を引用してみよう。

黄初四年（二二三）五月、白馬王の曹彪と任城王の曹彰と、そして私とは、いずれも都の洛陽に参内し、節季の会で会同できることになった。ところが私が洛陽に到着するや、任城王が「とつぜん」逝去したのだつた。やがて「帰国予定の」七月となつたので、私は白馬王と途中まで同道して藩国にかえるうとした。すると後日、朝廷の役人が、二人の王が藩国にかえるさいは同道してはならず、宿泊も別にせよと命じてきたのである。

私はこの命令を、ひどくうらんだ。「白馬王との」ながい別れが数日後にせまっていたからだ。そこで私

は、わが身をさくような気もちで、白馬王と惜別したのだった。そして、憤りを発してこの詩をつくったのである。

黄初四年五月、白馬王任城王与余俱朝京師、会節氣。到洛陽、任城王薨。至七月、与白馬王還国。後有司以二王歸藩、道路宜異宿止。意毒恨之。蓋以大別在数日。是用自剖与王辞焉、憤而成篇。

黄初四年とあるから、魏朝が成立して四年目、曹植三十二歳のときのことである。この年、曹植は入朝をゆるされて五月に洛陽に参内したのだが、なぜか、おなじく上洛中だった兄の任城王曹彰（同母兄）が六月十七日、不慮の死をとげたのだった。このとつぜんの死、『世説新語』尤悔篇では曹丕が毒殺したとするなど、異常な、そして不審の死であった。その疑念が解明されぬまま時間がすぎ、やがて七月、帰藩せねばならぬ時期となった。そこで曹植は、弟の白馬王曹彪（異母弟）と途中まで同道し、帰藩しようとしたのである。

ところが、朝廷の役人がいうには、ふたりが帰路を同道するのは不可、別々の宿にとまって帰藩せよと。当時は、宗族があつまることを警戒し、相互に交流することも禁じていた。帰途といえども、例外ではなかったのだろう。弟とは次回いつあえるともしれぬ。洛陽では兄の不慮の死もあった。はなしたいことは山ほどある。それなのに、なぜ帰路の同道がゆるされないのか。曹植は、これを非道なしうちだとし、心のなかで「毒恨」（ひどくうらんだ）した。そして憤激のあまり、いつきにこの詩をつくったのである。

このようにこの「贈白馬王彪」詩は、「憤りを発してこの詩をつくった」（憤而成篇）ものである。まさに彼の多感な性格が、心中に「憤」の情をたぎらせ、その結果できあがった詩だといってよい。そのためか古今、この詩は曹植の絶唱だとされ、たかく評価されてきたのだった。全六章からなるが、ここでは彼の憤りがよく表現された、第三章をあげてみよう。

疲労で黄色がかった馬は　なんとか前にすすむが

玄黄猶能進

我が思いは鬱々とし　なげくばかり

我思鬱以紆

鬱々として　なにをなげくのか

鬱紆將何念

親愛な弟と離別してしまつたからだ

親愛在離居

もともと同道しようとしていたのに

本凶相与偕

途中で変更されて　同道でできなくなった

中更不克俱

邪悪なフクロウが馬車の轅の上でなき

鴟梟鳴衝柅

残酷なヤマイヌが大通りでたちぶさがる

豺狼当路衝

蒼蠅のような連中は　道理をみだし

蒼蠅間白黒

讒言の徒が　親族の仲をさこうとする

讒巧令親疏

ひきかえそうにも　小道はみつからず

欲還絶無蹊

轡をとってはみても　ただウロウロするだけ

攬轡止踟蹰

いかがだろうか。 帰路の同行をゆるさぬという、冷酷な役人。 その非道さに、曹植が過剰に反応し、過剰に憤激しているようすが、手にとるようにつたわってくるではないか。 たとえば原文でいえば、「鬱以紆」「鬱紆將何念」は、同道を阻止されたことへの憤りを、そして「鴟梟」「豺狼」「蒼蠅」「讒巧」などは、冷酷な役人への「毒恨」の感情を、それぞれよく表現した字句だといつてよからう。

この詩に対しては、たとえば、

この詩は、「同道をゆるされなかったという」事実を依拠して叙し、おもつままかたつたものである。曹植

の心中には、おおくの苦しみがたまっていた。だから彼が思いをつつたえれば、どの句も絶妙なものになったのである。

只抛事直述、任意直写。以原有許多苦切、故說来自無一不妙。

という評がくだされている(『文選集評』に「孫曰」としてひく)。この評、この「贈白馬王彪」詩をつくったときの曹植が、「おおくの苦しみがたまっていた」心情だったことを、よくみぬいている。そうした心情でつくったので、「どの句も絶妙なものになった」のだった。

詩文創作の見地からみれば、こうした曹植の多感さは、わるいものではなかった。かかるゆたかな感性があればこそ、曹植は、文学史にのこる傑作群をかくことができたのだらう。曹植は、身辺になにか事件がおこると、すぐそれに敏感に反応して、喜怒したり哀樂したりする。そしてその感情をおおしく増幅させ、激情をほとばしらせたのだった。

しかし、感情をたかぶらせるだけだったら、彼はただの激情家というにすぎない。曹植は、この多感な性情にくわえ、天与の詩才を有していた。その才によって、激情のほとばしりを、一瞬の叫びでおわらせず、感情ゆたかな詩文に、サツと定着させることができたのだった。それゆえ彼の詩文は、いわば喜怒や哀樂の咳唾がいたが、そのまま珠たまをなしたものだといつてよからう。だからこそ彼の詩文は、よむ者の心をゆさぶり、その琴線にふれることができたのだった。<sup>(2)</sup>

こうした曹植の創作に対し、馬積高『賦史』は、

曹植の賦は彼が自分でいうように、ほとんどは「なんらかのできごと」に遭遇してつづった(原文「触類而作」)ものだ。だから、曹植がその生涯でくわしたできごと、たとえば個人的な昇降、哀樂、親戚・友

人との出会いや別れから、軍国に関する重要案件にいたるまで、ほとんど賦につづらないものはなかった。彼はまた、すきかつてにふるまう（原文「任性」）人間である。それゆえ、おのが情のおもむくところ、篇中で慷慨して悲歌したり、低徊して詠嘆したり、また発奮して激昂したり、陰々滅々とかなしんだりする。また、あてやかな文采をくりひろげるかとおもえば、口語のような闊達なことは遣いもするなど、多様な文学的風格をしめしているのだ。

とのべている（一五三頁）。これは曹植の賦にむけての発言だが、詩文全体にも通用するだろう。馬氏によれば、曹植の詩文は「なんらかのできごとに遭遇してつづった」（類に触れて作る）ものであり、彼自身、篇中で「慷慨して悲歌したり、低徊して詠嘆したり」するタイプだったようだ。つまり曹植にとって、詩文は、そのときどきの自己の感情を、率直にぶちまけやすい器だったのである。かく喜怒や哀楽の情を激白することで、曹植は一種のカタルシスを感じていたのだろう。

こうした「類に触れて作る」創作のしかたは、多感で激情にかられやすい曹植には、いかにもふさわしいものであった。しかし同時に、そうした創作は、曹植がいきっていた時代や状況のなかでは、ずいぶん危険なものでもあったといわねばならない。

『贈白馬王彪』詩の序によれば、曹植は同道を禁じた役人を、心中で「ひどくうらんだ」。そしてその激情によって「憤りを発してこの詩をつくった」のだった。しかし、とうぜんのことながら、その役人として、おのが独断で同道を禁じたわけではない。とうぜん魏廷（つきつめれば兄の文帝）の意向をくんで、そうした命令を発したはずである。もし「邪悪なフクロウ」「残虐なヤマイヌ」よばわりした曹植の詩を、当の役人がよみ、そしてそれを上部の者につたえたら、場合によっては、ご政道を批判したものとみなされ、不測の事態をまねきかねなかつ

ただろう。

だが、曹植はそうしたことを顧慮せず、いや多少は顧慮したかもしれないが、それでも自制しきれず、けつきよくおのが憤りを、そのまま詩に叙してしまつたのである。そもそも曹植はこのとき、朝廷の使者をおびやかした重罪を、文帝から赦免してもらつたばかりだつた（後述）。そうした自分の立場や状況をかんがえれば、かかる詩をつくるのは、不用心であり軽躁なふるまいでもあつたらう。しかしそれでも、憤りを発すると自制できぬのが、曹植という人物だつたのであり、また「性格はおおざっぱ」（性簡易）にして、「すきかつてにふるまって、自分をかざらなかつた」（任性而行、不自彫勵）という性格だつたのである。

#### 下筆成章

曹植の人がらや詩文創作の特徴をみておこつとして、記述がいささか、さきにすすみすぎてしまつた。評伝にかえり、少年時代の曹植をみてゆこう。

建安十三年（二〇八）六月、献帝は三公（司徒・太尉・司空）を廢して丞相と御史大夫を復活させ、曹操が丞相となつた。『後漢書』献帝紀には「曹植は「自ら丞相と為る」とあるから、献帝の命でなく、曹操みずから官制を改廢し、自分で丞相の地位についたのでらう。この時期になるや、官位の任命も自在にできるよつになつており、王朝をささえる大黒柱は、曹操そのひとだと、だれもがみとめざるをえなくなつていた。

さらに同年七月には、曹操は荊州に軍をおしすすめ、劉表の跡をついだ劉琮を降伏させた。そして江陵まで進軍し、その地から呉の孫権に書翰「与孫権書」をおくつたのである。それは、

ちかごろ余は「天子の」譴責の辞を奉じて、罪人を征伐せんとした。まず軍旗を南方にむけるや、劉琮は無

抵抗で降参した。ついで余は、水軍八十万をおしたてて進軍し、將軍（孫權）と呉の地で会獵したいとおもっておるのじゃ。

というものであった。

「呉の地で会獵したい」（原文「方与將軍会獵于呉」といふのは、婉曲表現にすぎぬ。じっさいは、「自分（曹操）となんじ（孫權）、呉の地において雌雄を決しようではないか」という意味であり、とおまわしに両軍の会戦を、さらにいえば「会戦をさけたいのなら」降伏せよと勸告しているのである。自信満々の曹操のようすが、よくうかがえる文面だといつてよからう。

かくして曹操は同年十月、赤壁の戦いにのぞんだのだった。この戦いは、周知のように曹操軍の完敗におわつたのだが、だからといって、曹操の勢威が傷つくことはなかった。ただ南方の制圧が、後まわしになったという程度にすぎない。

そうした大黒柱がデンとひかえるなか、曹植はおもに母や兄弟とともに鄴ですごし、ときに父の遠征にしたがうという日々を、すごしていたことだろう。右の赤壁の戦いは、曹植十七歳のときである。『魏志』の本伝は、そうした少年期のこととして、つぎのようなエピソードをしるす。

曹植は十歳余で、もう『詩』『論語』および辞賦数十万言を誦読し、詩文をたくみにつくつた。太祖（曹操）はかつて植の文をみたとき、「おまえは他人にかいてもらったのか」といった。すると植は、拜跪していった。「私は、ものをいへば論となり、筆をおるせば詩となります。どうかご面前でお試してください。どうして他人にたのんだりしましょうか。」

鄴に銅爵台が竣工したころのこと（建安十七年、曹植二十一歳）、太祖は諸子をつれて台にのぼり、おの

おのに賦をつくらせた。植は筆をとるやたちまち完成させたが、りっぱな出来であった。そこで太祖は、この植は並みの男ではない、とおもったのである。

このエピソード、冒頭に「十歳余で」とある。これをかりに十一歳だったとすれば、建安七年（二〇二）といふことになる。そのころの曹植がどれほど文才をしめしていたかが、この話によって知られよう。

右の記述、簡単なものであるが、これだけでもいろんなことがわかってくる。

まず、「詩」「論語」および辞賦数十万言を誦読し、からすると、曹植の教養が文学にかたよっていることに気づく。「論語」をのぞいて、「詩」と辞賦数十万言、いずれも文学系の書物である。これに対し、たとえば兄の曹丕は、「少くして詩、論を誦し、長ずるに及んで備に五經、四部、史漢、諸子百家の言を歴し、畢く覽くわんざる靡なし」だったという（典論自叙）。「詩」「論語」はおなじだが、曹丕はそれ以外に四部や史漢、諸子百家の書などもまなんでいる。じつに広範囲の読書ぶりである。

もっとも、曹植の詩文をよむと、経史や諸子に由来する典故も多用しているので、文学系以外の書をよまなかったわけではない。ただそれでも、曹植の読書範囲は、兄にくらべると、文学のほうにかたより気味であったようだ。じつさい、曹丕には「典論」という、政治論をふくんだ子類に属する書があり、また経伝を類聚した類書の『皇覽』も編纂させたりしているが、曹植にはその種の書物はない。はばひろい教養という点では、やはり兄のほうが上だったのだらう。

さらに右の本伝、「ものをいえば論となり、筆をおるせば詩となります」（言出為論、下筆成章）ともある。すると、十歳余の曹植は、すでに父から代作をつたがわれるほど、卓越した詩文をパパとつくれたようだ。すると曹植の才能は、大器晩成型でなく、神童型のそれだったのだらう。

こうした神童タイプの子どもは、六朝でもときどき出現したが、そのさいは、この曹植の話柄がよく想起されたようである。たとえば、梁の簡文帝（蕭綱）も幼時から詩文にすぐれたが、彼は父の武帝から、「この子はわが蕭家の東阿（曹植）だなあ」と嘆じられたという。つまり南朝梁においては、この曹植の話柄は典拠になっていたのである。

そうした曹植の才腕ぶりを、補足するためだろう。本伝の後半では、曹植二十一歳のときの「筆をとるやたちまち完成させた」（援筆立成）エピソードもつけくわえている。成長しても、依然として抜群の才能だったといいたいのだろう。

曹植のこうした援筆立成の能力は、成人後のみならず後世においても、称賛の的まとなった。六朝では文人たちがしばしば詩会をひらいて、詩を唱和したり、競作したりしていた。そうした場では、かかる「下筆成章」「援筆立成」の能力は、本人の才能のかがやかしさを実証するものとなったのだった。

じつさい、曹植のこうした能力は、文学ずきな曹操のもとでは、たいへん有利にはたらいたようである。おかげで曹操は、曹植のかがやかしい才能に魅了され、一時は兄の曹丕をさしおいて、彼を太子にたてようかとおもいなやむほどだった。これより何年かのち（曹植二十三歳のころか）のことになるが、つぎのような話柄がのこっている。

曹植は才能によって特別視されたうえ、丁儀や丁廙、楊脩らが右腕となって補佐した。おかげで、曹操は後継をなやむようになり、「曹丕にかえて」彼を太子にしようとしたことが、なんどもあったほどであった。

かくみてくると、曹植にとつては、邾の地ですこした十代、とくに十代後半のころが、いわば人生最良のときだったのだろう。この時期、彼は後継問題など気にせず、おのが能力を存分に發揮することができた。そしてお

のが詩才を無邪気に自慢し、また周囲からすごいぞと感心してもらえたのだった（それに対し、二十代になると、丁儀や楊脩らの野心によって、右のごとき立太子争いにまきこまれてしまう。そのため彼の無邪気な言動も誤解されて、周囲との軋轢が生じてきやすかったのだった。後述）。

#### 十代の輝き

この十代の時期、曹植がもつともかがやいたのは、もちろん詩文の創作においてであった。ただそれは、彼の本意ではなかったようだ。曹植は、詩文の道などではなく、刀剣をにかけて戦場にうってで、はなばなしい功績をあげたいとねがっていたからである。

しかし父の曹操、まだわかずぎるとみなしたためか、それとも彼の軍事的能力をあやぶんだためか、曹植は、従軍をゆるされはしたが、重要な任務はあてがわれなかった。そのため、こと志とちがって、陣営の後方でおおくの文臣とともに、詩文の創作に従事することがおかつたのである。

このときの鄴の陣営には、おおぜいの俊英があつまっていた。曹操が徳たかき人物よりも、不仁不孝であつてもたかき人材をあつめたからだ（後述）。そつした一環として、詩文に堪能な文人も、たくさん招聘された。そつした文人たちは、軍国の書檄を執筆するのに役だつし、漢王朝、いや実質は魏王朝の文化的卓越を、周辺の人びとにみせつけるのにも、たいへん有用だつたからである。

では曹操の陣営（当初は許、のちに鄴）、つまり曹丕や曹植のまわりに、どのような文人たちがあつまつてきたのか。主要な人物のみ、はやく参じた順にあげてみよう。

まず曹植の八歳（一九九）ごろに、阮瑀が曹操のもとに参じた。あの阮籍の父である。阮籍は建安十五年（二

一〇）生まれなので、曹植は幼時の阮籍を realization したことがあったかもしれない。阮瑀ははやく、曹植二十一歳（二二二）のときに死んだ。<sup>3)</sup>

ついで翌年の九歳のとき（二二〇）に、劉楨と応瑒がやってきた。この二人は、ともに曹植にも親近したが、とくに劉楨は植に遠慮なく諫言するなど、かなり密な交際をしたようだ。

そして、曹父子が本拠地を鄴にうつした十三歳（二〇四）のときには、陳琳が曹操軍に投降してきた。彼は袁紹のためにつづいた「為袁紹檄豫州」で、曹操のことを「いほのごとき宦官の醜惡な子孫」（贅闖遺醜）だと罵倒していたが、曹操はそれでも彼をゆるしてやって、おのが傘下に入れたのだった。

徐幹がやってきたのは、それから三年おくれる十六歳のときであった。彼は有徳の君子タイプの男だったようで、とくに曹丕から彬彬たる君子であると、その人格をたたえられている。そうだとすれば、放縦気味な曹植よりは、冷静な曹丕のほうと、ウマがあつたのかもしれない。

ついで翌年の十七歳のときには、大物の王粲が荊州からやってきた。彼は名門出身だが、風采があがらぬ男だった。そのため、荊州刺史の劉表からかるんじられていたが、彼の死後、劉表の息子の劉琮をときふせて、曹操に帰服させ、さらに自身も鄴に参じたのだった。

以上の六人は、やや年長の孔融とあわせて、「曹丕の「典論論文」によつて」「建安の七子」と称されている。

これ以外に曹操陣営につどつた者として、潁川の邯鄲淳（前出）、繁欽、陳留の路粹、沛国の丁儀、丁廙、弘農の楊脩、河内の荀緯、兗州の呉質らもいたが、ここでは名をあげるのみとしよう。要するに、当時の最高レベルの文人たちが曹操の陣営、つまり曹植の周辺にあつまってきたのである。詩文ずきな曹植にとっては、ねがってもない環境だったといつてよからう。

曹植は、兄の曹丕やこうした文人たちとともに、遊宴したり、詩文の腕をきそったりした。その具体的な様相は、曹丕の書翰文でつぎのように叙されている。

○与朝歌令吳質書

過日の南皮での宴遊をおもいだすと、いつもわすれがたく感じます。私たちは六経の内容を吟味し、諸子百家の議論をあじわい、さらに弾碁をやったり、六博に興じたりしました。また談論して気分は愉快になり、哀切な箏の響きに耳をかたむけ、さらに北場で騎馬して狩獵し、南館でみなと食事したものです。甘瓜は清泉にうかんでいますし、朱李は冷水にしています。

やがて夕陽がしずんで、明月がのぼるや、いっしょに馬車にのって、後園をめぐりました。馬車はゆっくりうごいて、従者も声をあげませんし、清風が夜にふきよせ、悲笳の音がかすかにきこえたものでした。毎念昔日南皮之遊、誠不可忘。

既「妙思六経、弾碁閒設、終以博奕。」

「高談娛心、

馳騁北場、

浮甘瓜於清泉、

「逍遙百氏、

哀箏順耳、

「旅食南館。」

「沈朱李於寒水。」

白日既没、繼以朗月、同乘並載、以遊後園。

「輿輪徐動、參從無声、

清風夜起、悲笳微吟。」

○与吳質書

むかし貴兄らと行楽にでかけたおりは、すすめば馬車をつらね、とまれば席を接し、すこしもはなれたことがありませんでした。酒がくみかわされ、音楽が奏されるや、酒興がたかまって耳がはてり、空をあおいで詩をつくりあったものです。

昔日遊処、行則連輿、何嘗須臾相失。每至觴酌流行、酒闌耳熱、仰而賦詩。

止則接席。

糸竹並奏、

両篇とも、曹丕が呉質におくった書翰である。前者は、建安二十年（二一五。曹丕二十九歳）の作で、有名な「南皮之遊」を回想したもの、後者は建安二十三年（二二八。同三十二歳）二月の作で、おそらく鄴での清遊をおもいかえたものだろう。これによると曹丕や呉質らは、学問、博奕、談話、音楽、狩獵、ごちそう、散策、飲酒などをたのしみ、興がのつてきたところで、詩をつくりあっていたようである。多忙な政務やくるしい遠征のあいまだったからこそ、よけいに光輝にみちていたのだろう。

これらの宴遊で中心になっていたのは、おそらく曹丕だったに相違ない。彼は詩才もあつたし、なにより漢の丞相たる曹操の長子だったからだ。「南皮之遊」を主催したのも、おそらく彼だったのだろう<sup>(4)</sup>。そして弟の曹植や右の七子らは、この種の宴遊の常連だったはずだ。多忙な父の曹操も、ときにはチラツと顔をだすことがあつたかもしれない。

曹丕らの宴遊では、「南皮之遊」がとくに有名になっている。だが当時、曹操が軍府をかまえていたのは、南皮ではなく鄴の地であつた。とすれば鄴でも、いや鄴でこそ、こうした宴遊が頻繁におこなわれたのだろう。右の書翰で、曹丕がわざわざ「南皮之遊」に言及したのは、おそらく「鄴から」遠出してあそんだ珍奇な体験だったので、とくに印象ぶかかったからではないか。実態としては、曹操らが鄴にうつった建安九年ごろから「七子が死にたえる建安二十二年ごろまで」、いろんな機会をとらえては、曹兄弟や七子らを中心に、鄴やその周辺で同種の宴遊をたのしんだのだろう<sup>(5)</sup>。

そうした宴遊の場でつくつたとおほしい作を、一篇しめしてみよう。詩はこれまで、いろんな研究者によって

紹介されてきているので、ここでは賦ジャンルをあげてみたい。つぎにしめすのは、「娛賓賦」と題された賦である。創作年ははっきりせぬが、おそらく曹植の十代後半ころの作だろう。

夏の太陽の暑熱にさらされると、清涼な曲観にあそびたいもの。そこで「公子さまは」盛会をひらいて賓客をたのしまそうと、丹色にかがやく帳を四方にはりめぐらせた。

そして厨房のご馳走がならべられ、斉鄭の美女の歌舞が披露されてゆく。いならば文人たちは卓説をかたり、またサツと筆をとって詩文をかきあげる。さらに彼らは、昔日の清風を談じたとおもえば、聖賢の法制を議論しはじめた。

宴中の公子（曹丕）さまの高雅なお姿は、まことによるこぼしく、その徳義のかぐわしいことは蘭のごとくである。仁愛を貧士までおよぼされているが、それは、食事を中断して人材と会見した周公よりこりつぱだ。公子さまの仁による徳化を耳にすれば、憂いもわすれてしまし、酒も料理もいよいよおいしく感じられることである。

感夏日之炎景兮、遂衍賈而高会兮、丹幃暉以四張、  
游曲觀之清涼、  
辦中廚之豐膳兮、  
文人聘其妙說兮、飛輕翰而成章、  
談在昔之清風兮、  
作齊鄭之妍倡、

総賢聖之紀綱。

欣公子之高義兮、徳芬芳其若蘭、揚仁恩於白屋兮、踰周公之棄餐、  
聽仁風以忘憂兮、美酒清而肴甘、

これは内容からみて、曹丕が賓客たちをまねいて、ともに宴遊している場面を叙したのだろう。したがって、

標題の「娛賓賦」は、曹丕が賓客をたのしませる賦、の意に解さねばならない。清涼な曲観、盛會、ごちそう、齊鄭の美女、その歌舞、卓説、詩文、談論などをたのしんでいるのは、南皮之遊と同断である。賦中に「公子さまの高雅なお姿は、まことによるこばしく」（欣公子之高義令）とある。ここの「公子」は曹丕をさすのだから、すると「欣ぶ」の主語は、賓客たちだろうか、それとも曹植自身だろうか。

この種の宴遊をよるこぶ作は、ほかに「公宴詩」や「侍太子坐詩」などがあるが、いっばう、七子たちの手になつた同種の作もすくなくない。それらでは、宴遊の主催者は曹丕でなく、曹操だったりすることもあるが、そうであつても、内容はあまりかわらない。主催者がだれであつても、作者がだれであつても、この種の宴遊の詩は、いずれも同工異曲だといつてよい。要は、「○○さまが、この清雅な宴遊にまねいてくださった。私はたいへんうれしく、感謝もつしあげる。徳望たかき○○さまに、幸おからんことをいのる」という内容である。こまかくみると、その宴遊の描写や感謝のしかたに、作者によつて、多少の違いやくふうがあるのだが、そうであつても、大勢は似たようなものだといつてよい。

右の「娛賓賦」も、そうした一連の詩文のひとつである。したがつて、この賦に関しては、いくら天才曹植の作といつても、それほど傑出しているわけではない。曹植は多感な男であり、なにかあると、すぐ大仰に喜怒哀樂しがちだったが、この賦ではそれほどでもないようだ。やはり彼は、「喜」や「樂」よりも、「怒」や「哀」の情緒においてこそ、もっとも感興がわいてくるタイプだったのだろう。

#### 「七啓」の創作

では曹植の少年時代、具体的には十代の作として、最高傑作はなにかとわれれば、私は躊躇なく、十九歳時

の「七啓」をあげたいとおもつ。この「七啓」は「七」ジャンルに属する。このジャンルは、説得役が山林にひそむ隠者を出仕させようとして、「世間にでてみましよう。世間にはこんな楽しみがありますよ」とかたりかける——という内容を有している。<sup>(6)</sup>

そうした七ジャンルの「七啓」、曹植はどうやら、父の「求賢令」発布に刺激されてつくついたらしい。建安十五年（二一〇）、十九歳の曹植は、父曹操の庇護のもとで、たのしく充実した日々をすごしていた。そこへとつぜん、心がおどるような令が、漢の丞相たる父から発布されたのである。それが「求賢令」であつた。曹植、父のとつびな言動におどろかされるのは、たびたびのことだつたらうが、この令の文面をよんだときも、「わが父ながら、すごい」と一驚したことだろつ。

その「求賢令」とは、朝廷に有能な者をおつめたい。下層の者でもよいので、推薦してほしい——というもので、それ自体は、ごく平凡な求賢（人材採用）の布告にすぎない。だがその求賢の内容たるや、おどろくべきものだつた。その大要はつぎのごとし。「天下はなお統一されていない。されば、いまこそ求賢をいそがねばならぬ。……廉潔な人物ばかりあつめていたら、齊の桓公は覇者とはなれなかつたはずだ。いま天下に、志をえず、浜辺で釣り糸をたらしている者はおらぬか。兄嫁と密通したり、収賄したりした者でもかまわぬ。諸君よ、「廉潔の士でなく」才能ある人物をこそ推薦してくれ。才能があること、ただそれだけが条件だ。そうした者を、余は採用するであらう」。

求賢令を発布する場合、通常だつたら、儒教ふう徳目、たとえば賢良や方正や孝廉などにひいてた人物を、推薦させることだろつ。ただそれだと、いわばお行儀のよい人物ばかりがあつてき、真に才能ある人物は推薦されにくかつた。ところが曹操は、「お行儀がわるくてよい。才能がありさえすれば、どんな者でもよいぞ」。

兄嫁と密通したり、収賄したりしている者でもかまわぬ」というのである。儒教のかたぐるしい教えなど一蹴し、才能一辺倒の求賢（原文は「唯才是擧」）に徹底している。じつに破天荒な、そしてじつに曹操らしいリクルートだといわねばならない。

この父の「求賢令」発布が、隠者（才ある者）に出仕をうながす、息子の「七啓」創作につながったらしい。そうした見かたが、研究者のあいだで、ほぼ通説となっている。<sup>72</sup>

くわえて曹植は、以前から七ジャンルがすぎだったようだ。「七啓」の序文で彼はいう。「むかし枚乘は七発を作り、さらに傅毅は七激、張衡は七弁、崔駰は七依を、それぞれつくった。文辞はどれも美麗で、私はこれらをこのんだ。そこで七啓をつくり、王粲にも同作させた」と。これによると曹植は、以前から七ジャンルの有する美麗な行文が、たいそう気に入ってもいたのだった。

すると、この「七啓」の創作は、つぎのようだったのだろう。すなわち、以前から七の文をこのんでいた曹植は、父の大胆な「求賢令」に刺激されて、父の求賢を側面から応援しようとおもいたった。そこで、隠者を出させようとする七ジャンルをつづつて、山林にひそむ隠者だけでなく、才能をもちながら野にいる人びとに対しても、出仕をよびかけようとした――。

この七のジャンルは、通常つぎのような七段の構成をとる。すなわち、説得役が隠者を出させようとした。そこで、「ごちそうや美服、狩猟、高樓、歌舞、美女等の楽しみを、隠者にむかって熱心にかたりかける。「世間にはこんな……の楽しみがありますよ。隠所をでて、たのしまれませんか」。かく六度にわたって隠者をいざなうが、それでも彼は関心をしめさない（六否）。そこで説得役は七度目に、明君の統治のすばらしさをかたる。すると隠者は心をここかされ、ついに世にでて出仕する決意をした（七是）――という構成である。「七」のジャ

ンル名も、この七段の構成に由来するのだろう。

こうした七の文、形式上は、最後の「明君の統治のすばらしさ」をかたった一是の部分で、中心ということになる。しかし実態としては、隠者からは関心をよせられなかったものの、ごちそうや狩獵、歌舞、美女等を列挙した六否の部分のほうで、七ジャンルの眼目なのである。そこで叙される六否（狩獵や歌舞）の豪勢さやぜいたくさが、読者の欲望や想像力を刺激して「ああ、いいなあ」とおもわせる。それが、この文にとっては、もっとも重要なことなのだ。その意味で、七は真摯な招隠の文というより、娯樂的かつ遊戯的なジャンルだといってよからう。

ところが曹植の「七啓」では、そうした通常の「七」の文とことなり、最後にでてくる明君の統治をかたる部分にも、重心がかかっているのである。以下、具体的に説明しよう。

まずは、説得役が隠者にむけてかたる六つの楽しみ（六否）のなかから、美姫と狩獵とを叙した部分をしめそう。曹植十九歳時の文藻の美もしめしたので、ここでは書きくたして引用しよう。

○美姫を叙した部分

「紅顔は笑うに宜く、時に「美姫は」吾子とともに、手を携えて同に行く。  
睇眄は光を流す。」

「飛除を踐み、華燭は爛き、朱唇を動かし、羅袂を揚げ、  
閑房に即く。幄幕は張る。清商を発す。華裳を振る。」

九秋の夕、歡を為して未だ央まず。此れ声色の妙なり。子は能く我に従いて之に遊ばんか。

○狩獵を叙した部分

「獠徒は雲のごとく布き、」  
 「丹旗は野を燿し、」  
 「文狐を曳き、」  
 「鷓鴣を拵ち、」  
 「武騎は霧のごとく散ず。」  
 「戈爰は皓旰たり。」  
 「狡兔を擽る、」  
 「振鷺を拂つ。」

「軌に当たりて藉かれ、飛軒は電のごとく逝ぎ、」  
 「獸は輪に隨いて転る。」  
 「足に値いて踐まる。」

「翼は張るに暇あらず、」  
 「動けば飛鋒に触れ、」  
 「林を搜し険を索め、」  
 「……」  
 「足は騰ぐるに及ばず。」  
 「拳ぐれば輕矚に挂る。」  
 「薄を探り阻を窮む。」

此れ羽獵の妙なり、子能く我に従いて之を觀んか。

前半は美姫がくつろいでいる場面である。ここは、定情賦などによくみられる艶麗な描写だが、「紅顔は笑つに宜い美姫をえがいて、いかがですか。こうした美姫たちといっしょに遊宴しませんか、と隠者をいざなっている。なかなか魅力的な行文である。

いっぽう後半は、狩獵の楽しみをかたつた部分。ここでは、いきいきした狩りの場面に注目しよう。騎馬が野原に集結し、野原に赤旗がはためき、矛戟は陽光にかがやく。獵人たちは鳥や獸をおいつめ、つぎつぎと射かけゆく。車馬は雷のごとく迅速にうごき、「射られた」獸は車輪のあいまにころがる。鳥はとびたついとまもなく、獸はにげることができぬ——。いさましく、またたのしそうな狩獵のさまが、対偶構造のなかで、整然と、そしてスピード感をもって叙されている。「曳く」「擽る」「拵つ」「拂う」と動詞をたたみかけるのは、狩りの躍動感をたかめるためだろう。わかき曹植の旺盛な筆力を、感じさせる部分である。

その他、「七啓」では、美味、美服、宮殿、義士などが叙されている。そして、それら六否がいかにかたのしく、いかにすばらしいかを強調したうえで、「世間にはこんなよきものがありますよ。隠所からでて、私どもとたの

しみませんか」といざなうてゆくのである。こうした六否の叙述は、いわば六篇の賦をつなぎあわせたものといえ、美麗な行文が連続するたいへんな雄篇となった。劉勰はこの「七啓」を評して、「美を宏壯に取る」、宏大壯観な点に美点をみいだしているが、たしかにいいえたものといえよう。

ところが、曹植「七啓」ではこうした六否だけでなく、最後の一是もじゅうぶん重みをもっている。この七ジャールの祖とされる枚乗「七発」では、この一是は叙されなままでおわっていた。枚乗の意識では、重要なのは楽しみをかたつた六否の部分だけであり、かたぐるしい一是など、なくてもよい程度のものであったのだらう。その意味では、「七発」はいかにも、俳倡ふう宮廷文人がつづつた作らしいものであった。

ところが、この曹植「七啓」はそうではない。最後の一是でも、たいへん力がいっているのだ。それは、つぎのようなものである。

いま天下には聖明な宰相がいて、天子さまを補佐して覇業をなさせようとされています。その度量は天地にひとしく、光輝は日月にもおとらないし、その感化力は神祇にせまり、精霊とひとしいほどです。恵みは辺地までおよび、威厳は全土をおおい、そのため殷周のころより平和で、伏羲氏の時代をつくほど安泰となりました。漢朝は静穩で、王道はとおくゆきわたり、民は草のようになびき、恩沢は陽春のごときです。岸辺には許由のような隠者はおらず、山林には巢父のごときひとはおりません。

おかげで俊英たちも出仕して、王朝の光輝にみとれています。宰相さまは、彼らを推挙して野に遺賢なからしめ、得意の分野で活躍させているのです。……

貴殿もこの太平の民となって、帝堯の御代のごとき世に出仕されませんか。

世有聖宰、翼帝霸世。

同量乾坤、玄化參神、与靈合契。

惠沢播于黎苗、

等曜日月。

威靈震乎無外、

超隆平于殷周、踵羲皇而齊泰。

顯朝惟清、

民望如草、

河浜無洗耳之士、

王道遐均。

我沢如春、

喬岳無巢居之民。

是曰俊乂來仕、觀国之光。

拳不遺才、……

進各異方。

吾子為太和之民、不欲仕陶唐之世乎。

ここで曹植は、熱心につつたえる。いま天下には聖明な宰相さまがいて、天子さまを補佐して霸業を完成させようとしている。その度量は天地にひとしく、光輝は日月にもおとらぬほど。そして宰相さまは、俊英たちを推挙して野に遺賢なからしめ、得意の分野で活躍させている。貴殿も太平の世の民となって、帝堯の御代のごとき世におつかえされませんか――。

この一是では、天子（献帝）でなく、「聖明な宰相」（原文は「聖宰」）が中心になっているのに注意しよう。「聖明な宰相とは、もちろん父の曹操のことだ。その偉大な父親が、このたび「求賢令」を發布して、有用な人材をほしがっているのである。そうであれば、息子たる曹植がつづる（「七啓」中の）一是に、熱がこもってくるのもとげんだろう。かくして曹植「七啓」は、この充実した一是があることによって、父の「唯才是挙」の主張を是認し、応援する作となったのだった。

この「七啓」、一篇の文学作品としてみると、前半の美麗な行文が連続する娯楽的な六否と、末尾の政治的主張をおこなう真摯な一是とが、うまく連結し、調和しているといつてよい。いわば文学的美麗さ（娯楽性）

と政治的実用（真摯さ）とが、たくみに結合されているのである。梁の昭明太子が理想視した、沈思（政治的実用）と翰藻（文学的美麗さ）とを兼備した作と称してよいであろうか。

ただ私見によれば、この「七啓」には、そうした二者（文学的美麗さと政治的実用、または娯楽性と真摯さ）の結合にくわえて、わかき曹植が邯鄲淳にしかけた、あの「天人」ふう初対面と同種のいたずら心こころも、またひそんでいるように感じられる。

曹植は前半の六否で、華麗な文藻をふるって娯楽ふう楽しみを列挙し、おのが才腕を誇示する。ところが末尾の一是にいたるや、筆を一転させて聖明な宰相の求賢ぶりを賛美し、「貴殿もこの太平の世の民となって、帝堯の御代のごとき世に出仕されませんか」とかたつて、父曹操の「求賢令」を応援していた。これは、論旨のあざやかな反転だといってよい。私はこれを見て、邯鄲淳との初対面における同種の反転、すなわち「前半＝放埒な振るまい　後半＝まじめな議論」のいたずらをおもいだしてしまった。

そもそも曹植が、父の唯才の人材採用に賛同し、応援するだけだったら、たとえば「唯才論」という論ジャンルの文をつづつてもよかつたはずだ。それが通常のやりかただったろう。ところが曹植は、そうした真摯な論でなく、七という娯楽的なジャンルをえらび（曹植は、王粲にも七の作を同作させており、遊びぶうの感覚で「七啓」つづつたのは明確である）、こつした論旨反転ぶうの作をつくつたのだ。そうした「七啓」創作の経緯に、おのが才能を顕示し、父曹操や周辺のおどろかせ、ちょっと自慢してやるうという、子どもっぽいたずら心が感じられる。

つまり私は、曹植はこの「七啓」においても、邯鄲淳と初対面のとき（「天人なり」と歎じさせた）とどうよう、あざやかな反転によってよむ者をあつげにとらせ、「さすがは宰相の「子息」と感心させようとしたのでは

ないか、とおもつのである。そういえば、父曹操が「求賢令」を發布したのも、子曹植が邯鄲淳とはじめて対面したのも、おなじ建安十五年（二二〇）、曹植十九歳のときであった。

(つづく)

注

- (1) 近刊の祝鼎民『曹植年譜考索 阮籍生平懸年考略』（北京師範大学出版社 二〇一三）十五頁は、この「求自試表」の同箇所中の「東は滄海に臨み」に注目し、曹操が建安十一年（曹植十五歳）、管承をつたんとして淳于の地へ進攻したとき、曹植もこれに従軍したのではないかとする。もしそうだとすれば、曹植の初陣はもう一年はやまることになる。後述するが、この「贈白馬王彪」詩にかぎらず、曹植の詩文では、なにに喜怒し、なにを哀樂するにせよ、すべてにおいて感情のトーンがたかい。旧時ではしばしば、「喜怒を顔色にあらわさぬ」ことが君子のたしなみとされ、褒めことばとして使用されてきた。そうした点からみれば、おのが喜怒をすぐ詩文に昇華させ、激情をぶちまける曹植は、とても至慎の君子とはいえないだろう。
- (2) 曹丕は阮瑀の死後、のこされた寡婦や遺児をいたんで「寡婦賦」をつくり、また王粲らにも同作させた。この阮瑀の死に関係した詩賦として、「寡婦賦」が曹丕、王粲、丁廙に、「寡婦詩」が曹丕、曹植に、それぞれ現存しており（曹植「寡婦詩」は二句のみの断片）、他にもかかれていたのかもしれない。そうだとすれば曹丕らは、おそらくのこされた阮瑀の妻子を援助したとおもわれ、阮籍と魏廷との関係は、そうとうつよかったのだろう。福山泰男『建安文学の研究』（汲古書院 二〇一三）第四章を参照。
- (3) 「南皮之遊」をおこなったのは、何年だったのか。これは諸説あって、確定できない。かりに曹道衡・沈玉成『中古文学史料叢考』（中華書局 二〇〇三）三十八頁にしたがえば、建安十年（二〇五）だったことになる。ときに曹丕は十九歳、曹植はそれより五歳下の十四歳である。

- (5) 松本幸男『魏晉詩壇の研究』（中国芸文研究会 一九九五）百四十四頁は、建安十六年（二一一）曹丕二十五歳、曹植二十歳ころが、曹丕曹植兄弟にとつて、もっとも幸福な時期だったろうと指摘されている。この曹兄弟によるたのしい宴遊を詳述した論文は、鈴木修次『漢魏詩の研究』やこの松本氏の大著をはじめ、枚挙にいとまがないが、私も拙著『六朝の遊戯文学』（汲古書院 二〇〇七）第四章ですこしのべたことがある。ご参照いただければありがたい。
- (6) 「七」のジャンルについては、拙著『梁の蕭兄弟 昭明太子・簡文帝・元帝』（汲古書院 二〇二四）の第三、十章でもふれておいた。ご参照いただければありがたい。
- (7) 徐公持『曹植年譜考証』百五十四頁（社会科学文献出版社 二〇一六）は例外的に、この「七啓」の創作を曹植十九歳でなく、二十二歳（建安一八年）のときだったとする。ただ私見によれば、徐氏の推測はやや根拠がよわいようにおもわれ、本稿では十九歳創作説のほうにしたがう。